フィリピンをもっと知ろう⑤（連載）

フィリピンと日本「山下財宝・黄金伝説の物語」

今回はルソン島に残る伝説「山下財宝」のお話です。

戦後、これまでも何度か伝えられているフィリピンでの山下財宝発掘のニュースを目にした方もおられることと思います。平成 7 年（1995 年）2 月 7 日の東京新聞の記事は「旧日本軍の『山下財宝』か引き揚げた日本人ら内輪もめ　27 億円相当」、毎日新聞は、「海底からプラチナ２トン　旧日本軍の地図を頼りに地元民が引き揚げ」と報じました。ルソン島北端の港町アパリの沖 20 メートルの海底から引き揚げられたプラチナと報じられた金属は、間も無く鉄の塊と判明。１件落着しました。しかし、この間に「巨大プラチナ塊発見」のニュースは世界を駆け巡り、プラチナ（白金）の国際価格を 40 円も下落させたのです。

そもそも「山下財宝」とは何なのか。

昭和 16 年（1941 年）12 月 8 日太平洋戦争が勃発、日本軍はフィリピンを占領。その後戦局は悪化し、米軍がフィリピンに上陸する情勢になった昭和 19 年（1944 年）10 月、シンガポール攻略で名をはせた山下奉文将軍がフィリピン防衛軍(第 14 方面軍)の最高指揮官としてマニラに到着しました。「山下財宝」とは、その山下将軍の名前を冠した日本軍の隠し財産を指します。

当時、日本軍の占領下にあつたフィリピンでは通貨としてペソと日本軍の軍票（軍が発行した紙幣）が流通していました。日本軍は物資を調達するのに軍票を用いていたのです。しかし、戦局が悪化しフィリピン人のゲリラ活動も各地で活発化する状況下となり、物価は激しいインフレで軍票では物の購入が困難になって来ました。

そこで軍部は物資調達のため「マルフク金貨」という金のメダル（金貨のようではあるが貨幣ではない）を鋳造し、約 2 万 5 千枚を何十の梱包に分けて軍の輸送機で昭和 19 年 2 月に日本からマニラに空輸したと言われています。金メダル表面には“福”のマークが付けられていたので（マルフク）金貨と呼ばれたのです。このほか、米国ドル、ペソ銀貨、砂金なども軍の財産として保有されていたようです。これも「山下財宝」に入るのでしょう。

しかし、米軍がルソン島に上陸すると、マニラにあった「マルフク金貨」の残りは、輸送部隊のトラックでバギオに運搬され、司令部付近の貨物廠に保管されていたといわれています。米軍がバギオに迫ると日本軍の関係者は「マルフク金貨」の一部を近辺の庭などに埋め、残りを各部隊に分けて北部山岳地帯に敗走していったと伝えられています。

終戦後、フィリピンではマニラからバギオ、さらにルソン島北部の日本軍が敗走していったルートのさまざまな地点に「山下財宝」が埋蔵されているという情報が、まことしやかに流布していったのです。そして、怪しげな地図をもとに発掘する人や、経済的に成功した人は「山下財宝」を密かに掘り当てたのだといううわさをされました。その伝説とも言える「山下財宝」は多分今でも、
フィリピンでは確信して財宝を探し発掘している人がいると言われています。

「埋蔵財宝」というとロマンにかられますが、「山下財宝」は日本とフィリピンの歴史の中では、悲惨な戦争の傷跡をあらわす話題と言えましょう。